

生き通しのいのち

まだまだ気の抜けない酷暑が続くが、8月も盆が過ぎ、後半ともなるとさすがに、朝晩、過ごしやすくなってきた。

めまぐるしく盆や施餓鬼の法要の日々を過ごし、いつものように静かな朝のひとときをむかえている。読経の鐘と木魚の音に驚いたのか、蝉が、一斉に、鳴きだした。

そういえば、昨日も恩師の寺の施餓鬼法要を手伝っていた折り、ちょうど、法要で、導師が施餓鬼法を修すると、開け放たれた本堂の窓の向こうの森で一斉に鳴く蝉の声が、まるでこの法要に集うかのように、心地よい微風とともに堂内に入り込んできた。蝉たちは、ほんのわずかなこの世の生涯を懸命に生きているのだが、小生には、あの世にいる精霊達が蝉のいのちをかりて、この法要にやってきて功德にあやかりながら喜びに込めているような気がしてならなかった。そう思えると誠にこの法要が有り難いものであった。

盆供養や施餓鬼供養法会には、法縁の僧侶方や菩提寺の檀信徒が大勢参拝して、災害や戦争、事故、病気、飢饉などにより非業な最後を遂げた精霊の人間ばかりでなく、この世に生を得て死亡したあらゆるいのちに対し、その苦しみや憂いを免れて、ゆるぎのない安らかな世界にましますようにと供養を捧げ、祈りを捧げる法要である。釈尊在世のときから続く行事である。

行事とはいえ、寺に住んでいると、それは単なる行事ではなく、あの世とこの世の接点となっていて、確かに、精霊がこの世のわれわれの供養の思いに込えてくださるように思えることをしばしば経験する。こうしたことは、日々、実感するものであるのだが、こうした行事を通じて、なお一層、強く感受することがある。

たわいもないことだが、例えば、ジメジメとした酷暑のさなか閉ざされた本堂で独り祈りを捧げていると、ふと、どこからともなく涼風が吹いてきて有り難いと感じることもある。

枕経に招かれて経文を供養すると、突然、その方の庭先に一羽の鳥が舞い込んできて、経文を唱えている間、何かを伝えるかのように、しきりに囀っていることもある。

夕暮れ、久しぶりに散策に出かけると、途中からしきりに後を追い、先になり後になり、美しい声で鳴く鳥に導かれある古いお堂にたどり着いた途端、寺から連絡があり、なんと、その山に関わりのある方が亡くなったということ。

ある僧が、突然、尋ねてきて、阿弥陀如来の画軸を見せながら、「この阿弥陀如来があなたを指名している」と語る。物売りの戯言だろうと思っていると、(おまえは三体の阿弥陀仏を供養しなければいけないときがあるのだ) という思いがして、やむを得ず引き取らせて頂いたのだが、それから、数年ほど経て、突然、実際に阿弥陀仏三体を供養する法縁に遭遇することになる。それを導いたこの

阿弥陀仏を経なければその三体の阿弥陀仏を供養することはできなかつたと、そのときの初めて気づき、このことは今でも不可思議に思っている。

このようなことばかりではなく、大げさかもしれないが人類の重大な局面に立たされることを暗示する不可思議な現象は頻繁に起こり、そのことは、これまでも「心の通信」で何度か取り上げさせていただいた。だが、別に奇をてらったことではない。事実をそのまま伝えているのだが、むしろ、「誰しものいのち」の背後に「声なき声があり、その声に耳をかさねばならない。」ということであろう。

寺に住んでいると、「いのち」というものは、この世やあの世を通して生き通しのものであり、しかも、この世では個々のいのちであるが、この世・あの世を通して生きているいのちはすべて一つのものから湧き出しており、すべては一つのいのちとしていきていることを実感させられる。

この世もあの世も一つの世界で、この世の苦しみはあの世の苦しみともなっていて、だからこそ、この世のわれわれが苦しみを乗り越えて安らかな世界を築く礎となるべく、大いなるいのちの本源から唯一無二のいのちとして刻々の生をえているのであろう。

だが、多くの人たちは、(どうせ、この世限りのはかないいのちでしかない)と感じている。それどころか、世界をまもり、地域をまもり、家族をまもるために自分はあると考えている人は少なくなったと聞く。自己中心性を丸出しにして憚らない権力者の横行が世界中でまかり通っている。

いま世界に繰り広げられている現実はあまりにも未熟な人間の自己中心性が露骨となっている。まるで、彼らの横暴の前にこれまで人類が長い間培ってきた叡智による正義や規範は全く無視され、反故にされ、破棄されている。それこそ、こうした反社会的な分子が権力と金力と傲慢性をむき出しにして、侵略し、殺戮を繰り返す。欺瞞に満ちた自分に好都合の論理のみをかざして、平気で人心を搾取し続けている。その暴力行為を支えるメカニズムは、なんと、軍事用の AI をツールにした破壊工作とテロまがいの一方的暴力行為である。世界は、なんとというおぞましい事態に直面しているのだろうか。

幼稚で未熟なものが権力についてしまえば、彼らの打ち出す自己中心性は単純極まりないものでも、権力の構造にはまると、こうした暴走を誰も止められなくなる。これが今直面させられている人類の問題である。この愚行をどうすることもできないというのか。しかも、人は自分のところに爆弾がおちてこない限り他人事である。

自ら墓穴を掘るような核戦争や世界大戦に陥っていないだけかもしれませんがとでもいうのか。はたして彼らにそのような規範やルールが期待できるというのであろうか。

(どうせ、この世限りのはかないいのちでしかない。ならば、自分の思い通りに生きてやる！)

武力と権力と富を手に行っている彼らは、見えるところでも見えないところでも暗躍し、理不尽な戦争を仕掛け、あらゆるいのちをごみくた同然のように扱い、破壊し、侵略し続けるのだろうか。

彼らの中に巣くう猜疑心や恐怖心は、自己中心的で排他的で強権的である。彼らは、絶えずそういう状態にあり、自己保身にのみ躍起となっている。多くのいのちを踏みにじりながら、平然と誇らしげに自分に都合のよい平和と繁栄を口にする欺瞞者達の集団である。

このような横暴に、誰しもがいかなともしがたい状態に陥るとは・・・。

あるものが、拳を高らかに掲げ、笑いながら「革命家は創造の前に破壊がなければ新たなものはうまれない。」と叫ぶ。彼らは、地球を破壊するために火星移住を企てているとでもいうのだろうか。

しかし、その破壊は、根本的に暴力でしかない。権威主義を打倒する新たな権威主義に過ぎない。彼らの言動は全く創造的ではなく、単なる自己中心的破戒行為にすぎないのではないだろうか。これではいのちの基盤そのものを破壊しているだけであろう。

ご覧なさい。彼らの、権力を笠に着た暴力の前に、あの世界に冠たる最高学府の学生達が、みな口をつぐみ、踏み絵に晒されている・・・。彼の天才性を抹殺して、いったい世界はどこへ行こうとしているのか？ AIに働かせて自分は遊びほうけるとでもいうのか。

あらゆる弱みにつけ込む権力者の支配の構造は恐怖に基づいている。

恐怖は自らが依存しているものの喪失にある。軍事侵攻はこうしたもののすべてを恐怖におとしめる常套手段である。故に、人は、一方で、愛するもののためにいのちをかけて戦うのだが、一方で、愛のかけらもない。兵士は単なる武力の駒でしかなく、こうした非人道性がいのちをかけて戦わざるを得ない状況に追い込み悲惨極まりないものとなる。

(どうせ、この世限りのはかないいのちでしかない。ならば、自分の思い通りに生きて、AIや物質文明を通じて自己の野望を未来にわたり実現してやる!)という。

だが、宇宙(あえて世界といわず宇宙という)はそうはできていない。物質世界の限られた世界が宇宙のすべてではない。物質的宇宙は一つの宇宙のわずか5パーセント弱でしかないといわれる。大半の見えざる宇宙であるダークマター、ダークエネルギーはまだ未解明である。

AIがいかに進化しようとも基盤を物質世界におく限り微々たるものでしかない。そのようなもので天下を取ったと錯覚する人間の傲慢さが余計に小さくさせている。

さて、お盆は単なる慰霊の寺の行事ではない。この刻々として先験より今に経過し消失し、絶えず新たな創造の世界で吹き込まれる本不生といういのちが、もともと、物質宇宙やダークマター宇宙やダークエネルギー宇宙を透徹し、無碍であり、相即不離(すべてのいのちがつながっていること)であることをわれわれ自身が実感する場でもある。

われわれ自身がこの世の地獄を展開する限り、あの世の地獄は無くならない。

故に、われわれには塗炭の苦しみ、地獄の苦しみを受容する機能が働いているような気がする。

問題は、「世界はあなたであり、あなたは世界である」というとき、「あなたは世界の中心」ではなく、「世界は、あなた自身であるが故に、世界のあらゆる苦しみはあなた自身の苦しみである。」それ

故、その悲惨な現実を直視しなければならない。その責任は次世代の未来ばかりではなく、個々の生き通しのいのちが果たすべき責任として死滅してもなおついてまわる責任であろう。

私たちは戦争によっていのちを奪われた者の悲痛な声を聞かざるか。こうした悲痛な人類の問題を乗り越えて心の底から笑える時代を生み出すことができるであろうか。

今朝方、本堂でそのような思いにかられていると、先ほどまで寄ってきて鳴いていた蟬の声がいつの間にか途絶え、全く静かになっていた。

そろそろ夏も終わりなのだろう。

萬歳楽山人 龍雲好久